

「正当なる教養」をいかに配信するか

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター 特任准教授
藤井 陽奈子

日時

2013 年 7 月 4 日（木）
14 時 00 分～16 時 30 分

場所

京都府立大学 図書館 3 F 視聴覚室

テーマ

「正当なる教養」をいかに配信するか

講師

岡山大学大学院教育学研究科准教授
山口健二先生

内容

講演及びディスカッション

講演概要

1. アメリカ高等教育とリベラルアーツ

大学は、ただ単に知識を生産して伝達するだけで、知識は何でもよいというわけではない。ある種の基準で選ばれたものを生産し伝達する。その選ばれた知識のことを学術あるいは教養と呼び、知識や情報と学術や教養との違いは一言で言うと、「正当性」であると山口氏は述べた。

何が正当なのか、単に知識を伝えるだけではなく、大学にふさわしい知識を選ぶという作業も含めて大学のミッションであるという。

したがって、大学は、ある種の知識を選ぶという大きな機能をもっているので、大学が拡張する、機能が変化することになると、社会全体の知識の構造を変えることになる。例えば、その選

ばれた知識を本研究会で着目する美術に置き換えるならば、社会全体の美術に関する認識を変えるという大きなことも起こりうるのである。そのことは、100 年もの時間をかけて、大学には美術系や芸術系があって当たり前というようになった今日のアメリカ高等教育の姿からうかがえる。

2. アメリカ高等教育における美術

日本では、芸大系の議論をする場合を除いては大学教育と美術に関する議論が抜け落ちてしまいがちなので、まずは、いかにアメリカ高等教育において美術というものが位置を占めているのかを確認した。

アメリカの総合大学（私立大学のイエール大学、公立大学の UCLA 等）には、実技系の質の高い制作をしている人が多く、美術館も必ずあり美術と親しみやすい。大学の中で美術が定着していったというよりも、職業としてのアーティストが、かなり普及しているのである。

また、これらの大学の美術館は潤沢な資産を所蔵しており、大学生だけではなく社会貢献ということで、地域の子どもを集め、社会教育のような形で通常の美術館と同じく様々なプログラムを行っている。さらに、アメリカの総合大学には、美術館以外にアトリエ、博物館、劇場、音楽系の施設等もあり、色々なイベントを行っている。

このように、ほぼ 100 年かけて、学術とは何かという長い議論の末、アメリカの大学の中に制作、スタジオ・ワークというのが位置を占め、当然のごとくアーティストが大学の中に存在するようになった。

ただ、大学の中に位置付くためには、考え方等を変えていかなければならない。その例として、本研究会では美術が挙げられた。

日本で美術を考えると、純粋美術、美術のための美術をイメージしがちで、応用美術、つまり生活の中の美術やデザイン、テレビ局等を美術とは捉えにくい。その考え方自体を打ち破らないと高等教育の中に位置を占めるというのは難しい。そこで、アメリカの大学で生活品や大量生産品が展示された具体的な例を示しながら、市民生活に密着したものとして美術や芸術があるのだという哲学を、まずつくる必要があることを山口氏は論じた。

最終的に、アメリカの大学で美術教育や芸術教育というものが決定的に位置を占めるきっかけになったのは、ハーバード大学が 1958 年に提出したレポートだった。ハーバード大学で美術教育を位置付けるべきかどうか、コミュニティーや専門委員会をつくって議論した結果を記したこのレポートの一部が本研究会で紹介された。

こうした軌跡をたどると、アメリカの大学は先進性と保守性を兼ね備えていることが分かる。それは、伝統にとらわれない新しい学問を行う先進性と、しかし何でもすぐ飛び付くということではなく、慎重に議論を重ねて、美術の場合には美術そのものの構造を組み換えた上で大学の中に取り込んでいくという保守性だ。拡大はしていくが、無理な拡大はせずに、議論を重ねて、様々な改革を積み重ねて増やしていくことの大切さが、美術をとおしたアメリカ高等教育の姿から見えてきたのではないだろうか。

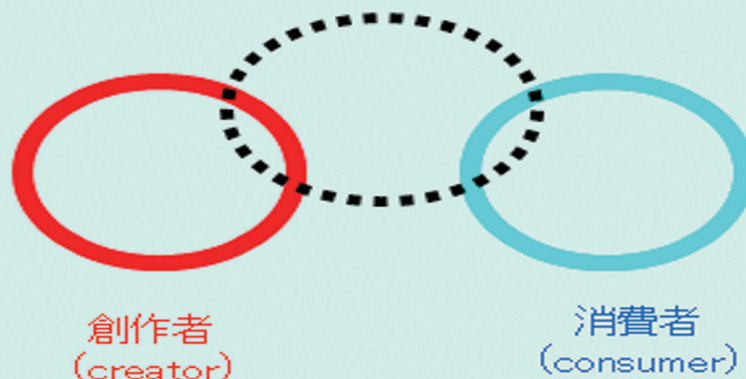
3. 文化社会学の観点から

文化検証を考えるときに、文化をつくる人と消費する人、この二つを考えるわけだが、重要なのはこの間に誰が立つかということである。

文化社会学の観点から

文化現象を巻き起こす第三のしかけ人

配信者(distributor)



この間にある制度がどう動くかによって、创作者の動きと消費者の動きが変わってくると文化社会学では論じられており、この図式は、アメリカ高等教育における美術や芸術にうまく当てはまると山口氏という。

大学という機関が、美術や芸術を人々に配る機関として力を付けていく。そういった中で消費者の行動が変わってくる。美術館に行く人が増えるというように、「市民として、美術館に行くぐらいのことをしておかないと」というような風潮が生まれてくる。

一方では、昔ながらの伝統的なアーティストではなくて、新しいタイプの、特に産業を重ねた美術にも適用できる人たちをどんどん供給していくというように、創作者の方も変化してくるのである。

4. まとめ

何に価値があり、何に価値がないかを確認しながら、何を伝えるべきかを議論し検討しながら行っていくということが、批評の仕組みである。将来の日本の高等教育を考えたときに、高等教育はどうあるべきか、これからの人材はどうあるべきかという批評の部分が重要になると山口氏は述べた。

例えば、美術や芸術を高等教育に入れたらどういうメリットがあるのか、いまの社会で美術や芸術はいかに大事なのか、そういう議論を集約していく中での価値観が形成される。その価値観に基づき、大学にふさわしい学術や教養として選ばれた美術や芸術が位置付けられる。加えて、大学で位置付けられるには、カリキュラム等の規格化（この規格とは法定規格ではなく、議論を重ねてつくっていくスタンダードのことである）が求めら

れる。

本研究会で示されたように、アメリカの大学の中で美術が位置を占めたのは、発言力が大きかったからである。誰かが決めるのではなく、皆で様々な議論をして、議論を聞くに値する議論を出せたところが残っていくのである。そのように、デモクラティックな意見交換の中から何か新しい哲学が立ち上がってくるというイメージは、日本人が持ちづらいものだと思う。学者等、誰かの発言に付いていくのであれば納得するのかもしれない。

しかし、アメリカと日本の高等教育の比較を通じて、我々が進む方向性について大学同士で議論をする中で、どういう議論が残っていくかというようなことを思考しながら進めていく方法やプロセスを設計することには意義があると考えられはしないだろうか。

また、講演後のディスカッションで、今後の日本の大学の教養教育に美術や芸術をどのように採り入れ変容を伴いながら学術化をしていくかについて、山口氏は触れた。

ビジュアルリテラシーという言葉があるように、文字情報よりも圧倒的に目から情報を得ている。だから、生活の中でビジュアルな情報を採り入れる大切さを示すことやビジュアルな情報をどう読み取るかということを考えるような、従来型の美術と違う新しい考え方を押し出すと、教養教育としての美術の位置付けができるのではないかと提案した。

最後に大学教育において何が正当であるかというのを議論し、大学教育がどこへ向かうべきかという重要な部分を見据える必要があるが誰かが与えてくれるのを待つのではなく、まず自ら発言していくのが出発点だと山口氏は改めて強調した。

成果

アメリカ高等教育には、伝統にとらわれない新しい学問を行う先進性の特徴がある一方で、慎重に議論を重ねて、美術の場合には美術そのものの構造を組み換えた上で大学の中に取り込んでいくという保守性の特徴がある。拡大はしていくが、無理に拡大をするのではなく、議論を重ねて改革を積み重ねて増やしていくというこの特徴を、我々は少し視野を広げるか柔軟性を持つ等して学ぶ必要があると思われた。

また、三大学で教養教育の共同化を進めている中で、科目の選択の幅を広げることにより、学生の学習意欲に応えようとしている。それだけではなく、学生が考えている教養や学びたい教養、例えば自分らしく生きていく力を養うために学びたいというような学生のニーズや求めに応えるには、大学教育のポジションにある者が、どういった中身を配信するのかということや配信者としての大学における教職員はどうあるべきなのかということを問われているのだと、改めて文化配信の構造から理解できた。さらに、そうした問いの答えを導き出すためには、本研究会で述べられたように、議論を重ねた末に大学にとってふさわしいものを選んでいくことが重要だと考えた。

本研究会の話は、時代が求める教養教育の目的や学習内容を考えていく上で貴重な手がかりとなり、特に平成 26 年度より開講する教養教育共同化科目に活かされることであろう。



活発な議論の中で（右上・山口氏）